

平成 29 年度 第 1 回 高校生川柳 受賞作品 講評

大賞	【句】 母の縫う これが最後の 背番号	作) 矢野 順也 様 (相可高等学校)
	【講評】ストレートでわかりやすい句です。まだ高校1年生なので中学時代を思い出して作った作品でしょうか。「これが最後」という言葉で、クラブ活動の最後になって、楽しいこと辛いこと、いろいろな思い出を回顧する作者の様子が伝わります。頑張ってきたけど、それは自分だけではなくお母さんが陰からサポートしてくれていたから続けられたという思い、口には出さないけれど感謝している作者の気持ちが伝わってきます。	
傑作賞	【句】 休み時間 小泉八雲と 夏の雲	作) 北村 郁佳 様 (相可高等学校)
	【講評】雲という言葉が掛言葉になっていますが、内容的にも小泉八雲の「夏の日の夢」というエッセイとも絡めているのかも知れません。この作品は浦島太郎の民話を自分の少年時代の記憶と絡めたような不思議な話で、随所に雲がテーマとして描かれているのです。小泉八雲は玉手箱を開けると紫色の雲に包まれ時間があつという間に過ぎ去り老人になるという物語を妻の節(せつ)からきいてとても気に入っていたそうです。この作品もほんの束の間、ぼんやり見ていた夏の雲が、心象風景のようにいつまでも心に残るような、そんな不思議な魅力を感じます。	
傑作賞	【句】 墨の香に 初心に戻る 古(こ)の習ひ	作) 伊藤 里桜 様 (相可高等学校)
	【講評】書道の授業の時の気持ちを詠んだ作品でしょうか。墨の香(か)、古(こ)の習ひ、といった言葉の使い方が成熟した国語力の高さとセンスの良さが光る作品です。書道の「道(どう)は道(みち)と書きますが、こうした言葉は他にもあります。茶道、柔道、剣道など。いずれも目に見えない精神を重んじ、その修養を心がけるところに特徴があります。初心に戻るという気持ちは学ぶもの、道を極めようとする者にとって忘れてはならない気持ちですね。	
傑作賞	【句】 蝉の声 途切れる一瞬 的中矢	作) 北村 郁佳 様 (相可高等学校)
	【講評】弓の練習のようすがまるで目の前で見てるように伝わってきます。夏の熱い日、流れる汗、ずっと響いている蝉の鳴き声。そんな中、心を集中させ、矢を射る瞬間、それがふと消える様子が伝わってきます。緊迫した静と動のコントラスト、一瞬に込められた時間が持つ意味、それらが詠み込まれた秀逸な作品です。	
傑作賞	【句】 あいさつが 終わって走る バス停へ	作) 阿久根 奈海 様 (相可高等学校)
	【講評】一本逃すとなかなか来ないバス。その時間が刻々と迫る、そのことで頭がいっぱい……。それなのに、授業が長引いて下校時刻がいつもより遅れてしまい、その後にクラスの終業の挨拶をしているのでしょうか、それとも帰り道でだれかに偶然会って挨拶しているのでしょうか……。バスに遅れまい、その一心で脱兎のごとく走り出すコミカルな様子を詠んだ川柳らしい作品です。	
傑作賞	【句】 雲をぬけ 空に広がる ちぐさ色	作) 大久保 綾人 様 (揖斐高等学校)
	【講評】雲とちぐさ色の空のコントラストが見えるような一句です。ちぐさ色とは灰色がかった水色のことで、古くなった衣を藍で染め直した色とされます。その昔、江戸の染物にかんする書物に「京都ではその色をちぐさ色という」という記述があり、もともとは関西の言葉のようです。高校1年生でこの言葉を作品に使う日本語力の高さを評価しました。	
傑作賞	【句】 せんぷうき 三台あるのに あたらない	作) 小川 珠里 様 (揖斐高等学校)
	【講評】夏の暑さを扇風機という小道具をうまく使い、だれもが思い当たるシチュエーションの面白さを詠んだ作品です。扇風機も1台ではなく、3台というところに川柳らしさが出ています。3台もあるのだから大半のエリアはカバーされるはずなのに、たまたま死角のようなところできて、そこに座っている、だけど教室は座席指定だから移動できない、そんなもどかしさがおかしさとして伝わってきます。シンプルに見えて、とてもよくできた作品です。	

傑作賞	【句】 演劇部 舞台の上では ちがう人	作) 岩崎 美優 様 (揖斐高等学校)
	【講評】 演劇では俳優が台本に合わせて別の人格を演じます。誇張しつつも、声、表情、身振り、手振りを通して台本の文字では描けない何かを観客に伝えます。演技のはずなのに、そこに人間の本当の姿、おかしさ、悲しさが表現されます。だからこそ、観客は感動し、魅了されるのでしょうか。この作者も演劇で普段の自分とは違うキャラクターを演じることで、隠れていた別の自分に出会う楽しさを見出したのでしょうか。	
傑作賞	【句】 ディクタトル その背中には パスの文字	作) 真野 輝一 様 (星城高等高校)
	【講評】 ディクタトルとは古代ローマの時代からある言葉で独裁者という意味で使われます。ローマ以降の世界史でも多くの独裁者が現れますが、多くの場合、その末路は哀れなものでした。20世紀のヒトラーも例外ではありません。チャップリンは「独裁者」という映画でナチス政権、ヒトラーを批判します。映画の最後の演説シーンで次のような一節が出てきます。「憎しみは消え去り(pass)、独裁者ら(dictators)は死に、彼らが人々から奪い取った権力は、人々のもとに返されるだろう」原文ではこの短いフレーズの中に「ディクタトル」と「パス」という単語が使われているのです。この映画はナチスが猛威をふるっていたさなかに作られました。そんな時代にこうした映画を作ったことは大きな意味があったのです。作者の真意はともかく、この川柳が人類の歴史上の大きなテーマを扱っているという解釈に立つならば、この作品を選ばせないわけにはいかない、審査ではそのような結論となりました。	
傑作賞	【句】 町工場 大きな夢で ものつくる	作) 野田 将吾 様 (愛知黎明高等学校)
	【講評】 小さな町工場と大きな夢、その対比がうまいですね。ソニー、ホンダ、京セラなど、今は日本を代表するような大企業も始まりは小さな町工場だったといえます。中部経済圏は日本のものづくりのメッカと言っても良い地域ですから、実際に資金も設備もない状況で懸命に試行錯誤を重ね、新たな技術や製品の開発に挑む中小企業も少なからず存在することでしょう。今後、いろいろな仕事が AI に置き換わってしまうのではないかとされる昨今ですが、若者が気概を持って、ものづくりにチャレンジする気持ちだけは失って欲しくない、そんな思いから選考させていただきました。	
傑作賞	【句】 もう大人 都合悪いと まだ子ども	作) 堤 莉南子 様 (東海商業高等学校)
	【講評】 親の言うこと、先生の言うことを聞きなさい、ずっとそう言われて育ってきたのに、もう大人なんだからそれくらい自分で考えなさい、自覚を持ちなさい、などと言われる。それで自分なりに考えて意見を言う、大人のファッションをしてみる、すると今度は、まだ子どもなんだから、などと言われてしまう。こんな経験はきっとだれもがあることでしょう。大人と子どもの境目にいるような高校生の作者の気持ちをコミカルに描きながらも、大人としては考えさせられる部分もある、なかなかリアリティのある作品になっています。	